書評

野口久美子 著
『カリフォルニア先住民の歴史―「見えざる民」から「連邦承認部族」へ』
（彩流社、二〇一五年）

阿部　珠理

評者は、ラコタ・スー族を研究対象にするアメリカ先住民研究者である。平原の勇者として知られるラコタ・スー族は、人口的にも勢力的にも大部族であったし、合衆国と締結した複数の条約によって「部族」認定がなされていたから、著者のカテゴリーに沿って言えば、ラコタ・スー族は、歴史的に「見えざる民」であったことは一度もない。同様に東部森林地帯のイロコイ諸部族、旧先住民史の白人中心史観から「開化五部族」と呼ばれていたチェロキー、セミノール、クリーク、チカソー、チョクトーなどの南東部諸部族、今も伝統的プエブロ（アドベ赤レンガの集合住宅のある村）に住み、伝統工芸品の制作に携わるホピ族、最大の保留地人口をほこるナヴァホ族などの南西部部族は、自身が明瞭な部族アイデンティティを保持し、合衆国との条約関係からも、自他ともに、「部族」であることは自明であり、歴史に埋没することはなかった。

対照的に本書の研究対象であるカリフォルニア先住民は、一八四八年のカリフォルニアでの金鉱発見を契機に、白人の当地への大流入の結果、疫病や戦いによって人口の大激減を経験し、小部族に分散して、そもそも見えづらくなっていた。彼らカリフォルニア先住民に関しては資料も乏しく、研究者の数も多くはない。そのカリフォルニア先住民の中で本書が対象とするのは、「トゥールリヴァー部族史」である。本書は、幾多の歴史的変遷を経験した彼らの「部族史」を構築する果敢な試みを通じて、ヨクート諸部族の集合体が、歴史的にも社会的にも不可視化されながら、あらたに「トゥールリヴァー部族」としてどのようにアイデンティティを醸成し、自他ともに認める「部族」が形成されていったのかを、「部族主義」「部族規定」をめぐる先住民社会と連邦政府の関係、両者の相克と協同を核に明らかした力作である。

全六章からなる本書の各章を概観したで、評者の所感を述べたい。

「はじめに―先住民と部族主義」では、今日の先住民の復権運動、政治・経済活動の拠り所が、六〇年代、「民族主義」から、「部族主義」へ変わったという認識のもと、この「部族主義」を支える「部族」とはいかなる組織であり、いかなる過程で構築され、また「部族」と合衆国とのどのような関係が、「部族主義」を構築してきたかの問いに答えるという企図が提示される。

第一章「アメリカ先住民史理論」では、時代を追って、「旧先住民史」「エスノヒストリー」「新先住民史」、「ネイティヴ・アメリカン・スタディーズ」（NAS）の方法論を整理し、理論的変遷を総括する。それぞれの方法論の射程と限界、例えば旧先住民史においては、言うまでもなく西欧中心史観を、エスノヒストリーでは文化の固定化の問題、新先住民史ではその修正史観がグローバルな文脈に欠くこと、先住民研究者に牽引されるNASでは、彼らのアイデンティティ・ポリティクスが招く分野の矮小化を指摘する。そしてそれら問題点の超克をめざす、自らの「部族史」研究の位置づけがなされる。

第二章「「部族」に関する考察」では、自己規定による伝統的な〝部族〟とは別に、合衆国との条約締結を通じて、合衆国によって外部規定された「部族」を先住民自らが受け入れ、今日まで続く部族主義が構築されてきた歴史的背景を概観する。本章の第二節は、かつてのヨクート諸部族内の部族・人口構成、社会構造に加えて、神話や衣食住といった生活のありよう、文化を紹介する民族誌になっている。

第三章「ヨクートとヨーロッパ諸国」では、スペイン、メキシコ、合衆国統治時代（一七七〇～一八五〇）におけるそれぞれの先住民政策を考察し、それらによって人口減少、社会崩壊、土地喪失を経験するヨクート諸部族が、合衆国との条約締結からも除外されて、アメリカ社会の中で「見えざる民」となってゆく、いわゆる不可視化の過程と様態を検証する。

第四章「「見えざる部族」と保留地アイデンティティの構築」では、「見えざる部族」となったヨクート諸部族が、彼らのために準備された「トゥールリヴァー保留地」にどのように移住させられ、統治されたかを、一九世紀中葉から二〇世紀初頭の連邦先住民政策を通して見ている。複数部族の共存の地となったトゥールリヴァー保留地の社会構造を分析し、ホセ・チコという一人の人物を通して、新たに形成される社会秩序とリーダーシップに着目している。

第五章「トゥールリヴァーにおける同化政策」では、キリスト教化、学校教育、土地、家畜政策等の同化政策を通して、共住地で共通体験を持つにいたったヨクート諸部族

は、各部族の伝統の垣根を越えて、集合的な「保留地アイデンティティ」を醸成するようになる。そこには、結婚式や祝日といったキリスト教的慣習や、新たな伝統としての「インディアン祭り」など、同化政策の誘導に主体的に呼応するヨクート諸部族の姿がある。連邦政府と彼らのこの「協同」こそが、後に創設されるトゥールリヴァー「部族」の基盤となってゆく「部族づくり」の端緒を開いたのである。またこの章には、家畜政策との関連で部族内で進行した社会階層化への興味深い言及がある。

第六章「「見えざる民」から「連邦承認部族」へ」では、同化政策から転じた連邦政府の政策改革における象徴的施策である「インディアン再組織法」の成立過程と、この法の適応により、「トゥールリヴァー部族」が誕生し、「見えざる民」が、「連邦承認部族」として政治的地位と法的権利を獲得して、可視化するまでを辿り、論考を終える。

「おわりに」では、現代の部族主義の発露としての「カジノ産業」に言及し、今後の課題を挙げて本書を閉じる。

アメリカ先住民研究に部族史をどうとりこむかは、長年の課題であった。文化人類学、社会人類学においては、分野の歴史的植民地主義加担の批判をいったんおくとしても、民族、文化集団として「部族」を扱うことは自明のことであり、現実に多くの蓄積がある。だが、アメリカ先住民社会を、ことに連邦先住民政策史との関連でとらえようとする場合、連邦先住民政策が標榜する普遍的原則と、部族の歴史文化の固有性、部族—連邦関係における個別性を、いかに接合的、包括的、動態的に議論するかは、多くの研究者にとって難しい問題であった。本書は政策史と部族史の双方向的な視点を交差させながら、一部族の連邦承認にいたるまでの歴史を丹念に掘り起こそうとするきわめて意欲的な論考である。ことにその対象になっているのが、連邦条約批准の埒外におかれた「見えざる民」として、これまで十分な関心が払われてこなかったカリフォルニア先住民、ヨクート諸部族であることは、連邦—部族関係の多層性、多義性を端的に示した点で、アメリカ先住民研究分野への多大な貢献である。

先住民は全般に植民地主義の犠牲者として、共通の悲惨な歴史を生きてきたが、その中でも、連邦との条約関係を持たない部族は、公式に部族とは認められておらず、法的にも守られないもっとも弱い立場に置かれる。つまりもっとも過酷な歴史を生きて来たその典型例が、本書のヨクート諸部族であった。著者は、本書の基軸の方法論である「政策史」を綿密に積み上げて、先住民政策の不整合、不公正、非人道性を明らかにし、ヨクートが追いつめられてゆく過

程の非道さを、実にリアルにあぶり出している。これは、広範に渉猟した一次史料と精度の高いその読み込み、理解から可能になっている。また何よりも「政策史」に人間が介在して、血の通った歴史になっている点を高く評価したい。

さらに、「部族」が構築されてゆく過程における連邦政府と部族の「協同」という視点の提示である。連邦―先住民関係は、とかく両者の二項対立に収斂される場合が多かったが、筆者は一方的な被害者としてのヨクートではなく、ことにトゥールリヴァー保留地設立にいたり、連邦承認部族と認定される過程で、ヨクートが発揮したエージェンシー、つまり連邦政府の牽引、誘導を、自らの主体をもって「活用」してゆく様相を提示している。支配―非支配の単純構図を脱して、交渉主体としてのヨクートを定位したことの意義は大きい。

ヨクートの連邦政府への対応、交渉は、先住民社会のサバイバル戦略とも読め、彼らが生き残りのために発揮した民族心性の柔軟性、強靭さを示唆してもいるだろう。ことに、四章、五章で、「保留地アイデンティティ」が醸成、構築される様相は、そのような心的属性の証左であり、あらたな文化創造の現場と、そのダイナミズムを余すところなく伝えている。

評者は、本書第一章でも言及されている「脱植民地理論」に立ってアイデンティティ・ポリティクスを実践する先住民系研究者や部族社会には距離を置いている。なぜなら、彼らは文化本質主義に囚われ、文化の相対性や可変性に充分な注意を払わないからだ。一八九〇年の国勢調査で先住民人口は二五万人にまで減少し、「消え行く民」のレッテルを貼られ、実際多くのアメリカ人がそう信じていた彼らが、消え行くどころか復活してきた要因の重要な一部に、彼らが状況に応じて発揮した主体的な選択や交渉、柔軟な対応があると評者は考えている。本書が、詳細な史実の積み重ねと具体的な事例をもってこれらを検証したことの功績は大きい。

アメリカ先住民研究の高い到達点を示す本書ではあるが、今後に課題を残していることも事実である。第一に指摘しておきたいのは、この「部族史」が「現代史」を欠いていることである。本書は、著者がカリフォルニア大学デイヴィス校のアメリカ先住民研究科に提出した博士論文がもとになっている。当校は、ネイティヴ・アメリカン・スタディーズの合衆国における拠点校の一つである。ネイティヴ・アメリカン・スタディーズは、歴史学、社会学、文化人類学、地理学、マイノリティ・スタディーズ、経済学、法学、カルチュラル・スタディーズといった広範囲の

領域にまたがり、かつその交点としての地歩を固めつつある。部族史がその領域の一部を形成しているかぎり、部族の過去が彼らの現代にどう繋がるかという視点を欠く事はできない。

著者はそのことに意識的であるからこそ、「おわりに」において、現代の部族主義の実践であると著者が位置づけるカジノ産業に言及したと思われるが、いかにも唐突で、それまでの章との文脈化ができていない。本書の歴史がインディアン再組織（IRA）で終わるのは、あくまで政策史に基軸をおく本書が、トュールリヴァー部族の「連邦承認部族」化を部族史の頂点と定位するからだろう。その点を認めるとしても、評者は、部族史は現代を射程にいれてこそ、現在多くの部族が経験する諸問題（貧困、環境、部族内不協和、アルコール依存、疾病、世代間断絶、アイデンティティ問題等）と歴史を架橋し、部族社会の全体像を提示できると考えている。カジノ産業という社会変動へのインパクトの大きい現代的事象も、部族史の文脈に位置づけられていれば、連邦政府のみならず州政府の先住民政策、部族に対する歴史的非／関与の矛盾や非整合性、ことに部族の収益を巡る問題に内在する州政府の非関与原則の逸脱という重要な議論も取り込めたものと思われる。

もう一点は、民俗誌的記述の不十分さであろう。第二章第二節から紹介される創世神話や文化事象は、ヨクートの文化的固有性を示すため挿入されたものと思われるが、それ自体非常に記述が薄く、他部分との有機的関連が見いだせない。強いて繋がりを求めるならば、第五章第二節の「部族アイデンティティの変容」で、著者が新たに構築された「保留地アイデンティティ」以前の部族アイデンティティが、一九三五年時点でも消滅していないと指摘している部分であろう（一六四頁）。しかし、この指摘の根拠が現地職員からインディアン局に送られた年次報告書のみによっていること自体、充分な検証にはなりえていない。また民俗誌を含むのであれば、前節同様、伝統や文化がどのような形で現在に継承されているかの調査が必要である。読者は、紹介された部族伝統のバスケット・メイキングなどが、現在はどうなっているのだろうかという当然の疑問を持つであろう。

とはいえ、民俗誌の「厚い記述」を求めることは、本書の調査範囲からはたぶん妥当ではなく、やはりそれは今後に委ねるのが正解と思われる。むしろ本書の主張を補強しないと思われる部分は思い切って捨象し、現在の保留地住民のアイデンティティ、部族主義の様態を明らかにすることも一考であったと思われる。そうすることによって、現在までの歴史の継続性を確保し、整合性と一貫性のいや増

すさらに完成度の高い部族史が誕生した可能性がある。またネイティヴ・アメリカン・スタディーズの中に、この論考がより正当な場を獲得したであろうというのが、評者の私見である。

加えて、トゥールリヴァー保留地における新しいリーダーシップの台頭と階層化の進展は、著者自身の発見であり、それのみで一節を設けられる重要な社会変容（分析によっては価値の継承）であるにも関わらず、散発的な言及に留まっていることは残念である。

しかし以上のような評者の指摘は、本書の価値を大きく損なうものでは、決してない。従来の部族概念の刷新、また「部族構築」という大胆で新鮮な枠組み設定とそのダイナミズムの精緻な分析は、現時点での優れた研究の到達点を示している。日本におけるネイティヴ・アメリカン・スタディーズを牽引する若手研究者として、今後の筆者の研究の進展を注視したい。

（本学社会学部教授）